

コリン・コバヤシ 著
▶ 国際原子力ロビーの犯罪
チェルノブイリから福島へ
7・1刊 四六判258頁 本体2400円
以文社



「エートス」とは何ものか

原子力発電は、人類文明が到達した最大級の倒錯の一つ

竹内雅文

原子力発電は、いったん大事故が起これば私たちの手で収束することはできない。事故は、恒久的に持続する破壊的大惨事の始まりに過ぎない。私たちはチェルノブイリや福島の事故後の状況の中で、それを今まさに経験しつつある。多くの人に悲惨で甚大な健康被害を与え、早過ぎる死をもたらした、地域の経済を破壊する。永遠に一般人の立ち入りを放棄するしかない現場は、生命圏に開いた広大な緩みである。しかし、こうした通常の原発に起こる事故は、想定可能な事故の中ではそれでも小規模なほうであった。高速増殖炉「もんじゅ」や、六ヶ所村のように核物質が巨大に集積している施設では、その幾十倍もの悲惨な状況を生む大惨事が想定できる。そしてまた一方で、原子力発電は、日常的な運転の状態にあっても、絶えず放射性物質を空間や水中に放出・拡散している。ウラン採掘から製錬、炉の定期整備などは、深刻な被曝を労働者に与える。後には永遠に処分のできない致死性の廃棄物の山ができる。そして民生原子力というのは、結局、湯を沸かして

いるだけなのである。それによってタービンが回って電気が生まれる。地球上で使われているエネルギーの約2パーセントがそれによって賄われている。それ以上のものではない。人類文明が到達した、最大級の倒錯の一つが原子力発電なのだ。この明らかに収支計算の合わない巨大装置が運転され続けているのは、その黒字の部分を中心部が吸い上げ、赤字の部分で周縁部に一方的に押し付ける構造が成立しているためだ。

そこで周縁性を拒むられるのは、地理的僻地であり、あるいは少数民族であり、また日雇いの労働者であり、知的障害者である。そうした場所に施設が置かれ、そうした人々が動員される。こうした状態を小出裕章は「差別」であると言ひ、高橋哲哉は「犠牲のシステム」であると言っている。「進歩」や「利便性」あるいはもっぱら資本主義的に定義された「生き残り」のために、あるいは特権官僚の利益のために、少々の犠牲はやむを得ない、ということなのだ。こうした周縁性はまた時間軸の中にも敷衍され、過去の方向の周縁部が現在の文明に「進歩」の幻想を与え、未来の方向の周辺部には、資源の枯渇と途方もない汚染の集積、端的に言って、「死の世界」が用意されているように思われる。

ここには明らかに加害者と被害者との関係が成立する。そしてこうした構造を特殊目的的に突出させるものとして、小出は「責任の所在を明らかにしない日本人のメンタリティ」を語り、高橋は丸山

眞男を引用して「無責任の構造」を語っている。しかし、福島の大惨事こそは、こうした犠牲、差別を可視化させるものであった。他人事であるはずの被害、犠牲が目の前にはっきりと具体的に存在するという矛盾を避けるために内面化させる必要がある。そこで登場してきたのが、本書でコリン・コバヤシがフォークスを当てている「福島エートス」なる妖怪集団だ。「いわき市の安東重子さん」なる偽名の人物によって始められたことになっている、インターネット上で拾える彼ら自身の説明によれば、エートスとはペラルーシで行なわれた復興プログラムの名前である。福島版エートスを指すというこの集団のチラシには、「ここでの暮らしは素晴らしい、よりよい未来を手渡す事ができる」とある。アリステレスの弁論術にロゴス、パトス、エートスの三種の説得法が定義されていて、エートスとは「信頼により理解を得る方法」であるということだ。ジャック・ロシャールというフランス人の指導を受けているが、このロシャールこそは「ICRRPの心」であるという。

「あなたたちの生活は美しい」というのがロシャールの殺し文句のようだ。そして、ICRRPの出している数値は別段、規程ではなく、ただの参考値だと言っている。どうぞ、お住みなさい。20ミリシーベ

「図書新聞」

2013. 9/28 (土)

ルト? 何ていうことありません。ICRRPのこの私が言うのですよ。ロシャールはフランスの団体CEPNのメンバーとしてこれにかかわっている。フランス電力、アレヴァなどによって作られた団体だ。

本家本元のペラルーシのエートスが始まったのはチェルノブイリの二〇年後、一九九六年である。強度に放射能汚染されたソトリン地区で、移住できずにいる人々に対して、現状を受け入れるように誘導するプロジェクトとして仕組まれてきた。フランスの核推進派がフランス電力、アレヴァ等をスポンサーに、ペラルーシのルカシエンカ独裁政権との利害の一致のもとに

進められてきたこのプロジェクトは、これまでエートス、エートス2、コア、サージュと名を変えながら続けられている。そもそもロシャールはチェルノブイリ以後の復興に、被災者の問題よりもコストベネフィット論を優先させる論陣を張ることによっての上上がった人物であり、二〇一一年に日本に登場した時は笹川に招かれてやってきたのだった。

本書では、こうしたエートスのような動きがフランスを中心に形成されるに至る経緯が、フランス在住四十数年の著者によって人事消息を中心に詳細にたどられている。一般人には聞き慣れない人名や組織名が連続するので、多少、とっつきにくい面もあるが、丹念に読んでいくと、シモーヌ・ド・ボヴォワールの後継者として名高いフェミニズム活動家のアニー・シュジエールが実は核推進派知識人の要の人物であることなど、思わぬ発見もあるだろう。日本の原発派には、原発の反対派vs.推進派の対立軸と左右の軸とを不用意に重ね合わせる傾向が強いが、そうした点を整理し直す上でも参考になる一冊である。

(評論家)